

JCES ニュース

Japan Comparative Education Society, No. 50

目次

1. 会長就任にあたって
2. 第 62 回大会を終えて
3. 第 36 回平塚賞の選考を終えて
4. 第 36 回平塚賞を受賞して
5. 総会報告（第 62 回大会）
6. 日本比較教育学会役員一覧（2026-2028 年度）
7. 新委員会委員長からのご挨拶
8. 第 63 回大会について
9. お知らせ
 - 2025 年度会計報告
 - 2026 年度予算案
 - 事務局の移転について
 - 学会への寄贈図書
 - 新入会員
 - 年会費納入のお願い
 - 特別会員制度について

1. 会長就任にあたって

日本比較教育学会 会長
森下 稔

このたび日本比較教育学会第 18 代会長を拝命しました森下稔です。JCES ニュース第 50 号という記念すべき号の冒頭で大変恐縮ですが、この場をお借りして、就任にあたってのご挨拶を申し上げます。去る 2026 年 7 月立命館大学で開催された第 62 回大会において会長に就任しました。



これから3年間、学会事務局を東京海洋大学におき、同僚の市川桂先生が事務局長を務めます。東京海洋大学に所属する学会員は二名のみであるため、萩原崇世理事に事務局長補佐をお願いするとともに、近隣の大学の会員から4人の常任幹事を選任して事務局を構成しました。チームとして協力し合いながら、学会運営に取り組んで参ります。

1965年に創設された本学会は2025年に60周年を迎えました。服部美奈前会長のもとで、私は担当理事として学会創設60周年記念事業に取り組みました。60年を超える学会の歩みを振り返る機会を得て、歴代会長による学会の発展に寄与されたご功績や、数多くの会員が比較教育学の発展のために尽力されてきたことをひしひしと感じました。私自身を振り返るとあまりにも浅学非才で、先達が積み上げてこられた学会史の重みにたじろぎもしました。しかしながら、理工系大学に勤務しているために比較教育学の後継者を育成する立場にない私でも、本学会に貢献できる機会が得られたことを感謝し、会長の任務に全力で取り組む所存です。みなさまのご支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、服部美奈前会長は、学会創設60周年記念事業のみならず、大会の完全対面開催への復帰、紀要論文のオンライン投稿、役員選挙のオンライン投票などを実現させました。その一方で、役員選挙制度の改革をはじめとする諸課題は私の任期に引き継がれています。現在の役員選挙制度、紀要の年二回発行、JCES ニュースの発刊、倫理綱領の制定など、学会の重要な柱となる制度や活動は、およそ25年前に第12代会長馬越徹先生が中心となって改革されたものです。馬越先生は当時、比較教育学に危機感を持っておられました。他の教育学諸分野において諸外国の教育が扱われるようになり、比較教育学の存在意義が問われていると同時に、学会が1000人規模になると量的な拡大が求心力を失わせる危機に直面するというものでした。当時の先生方は、そうした危機感を共有しながら長期的な視点で学会のあり方を検討されて、種々の改革に取り組まれたのだと思います。今、役員選挙制度を改革しようとするとき、単に理事の選び方を変えればよいというものではないと考えます。今後の10年、20年を見据えて、学会のあり方を中長期的に展望しなければならないでしょう。そうすると、多くの改革課題が浮かび上がってくるはずです。非常に荷が重い課題ですが、やり遂げなければならないと決意を固めています。

ところで、私が比較教育学に強い愛着を覚えるのは、比較教育学がおもしろいからです。例えば、フィールドに出たの調査はたいへん難しいことが多いのですが、難しいからこそ、新たな発見や知見が得られたとき、夢中になれるほどのおもしろさを感じます。比較教育学研究者の最大のモチベーションではないでしょうか。比較教育学のおもしろさを共有できる場であるということに本学会の意義を強く感じます。本学会の温かく楽しい雰囲気の中、会員のみなさまとともに、これからもおもしろがりたいと思います。精一杯務めて参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 第 62 回大会を終えて

第 62 回大会準備委員長

羽谷 沙織

2026 年 7 月 3 日（金）から 5 日（日）までの 3 日間、立命館大学衣笠キャンパスにおいて、日本比較教育学会第 62 回大会を開催いたしました。全国各地、そして海外から多くの皆様に京都・衣笠の地へお越しいただき、3 日間の大会を無事終えることができました。

本年度の大会参加者数は、合計 403 名でした。事前申込者は 221 名で、その内訳は、通常会員 135 名、学生・特別会員 45 名、非会員（通常）6 名、非会員（学生・特別会員）35 名でした。当日受付け者は 182 名で、通常会員 97 名、学生・特別会員 28 名、非会員（通常）20 名、非会員（学生・特別会員）37 名でした。研究発表については、ラウンドテーブル 10 件、自由研究発表 149 件の申し込みがありました。なお、自由研究発表についてはキャンセルが 6 件ありました。このほか、公開シンポジウム、2つの課題研究、学会創設 60 周年記念企画、ブックトーク・セッション、若手研究者交流会など、多彩な企画を実施しました。また、東信堂、明石書店、ナカニシヤ出版、Emerald Publishing の 4 社にも出展いただき、会場での書籍販売が行われました。前年度の第 61 回大会においても多くの参加者を得ており、その活況を引き継ぐかたちで、本大会にも幅広い層から多数の皆様にご参加いただきました。

今回の大会を振り返ると、その大きな特徴の一つは、比較教育学がこれまで自明視してきた教育や知の枠組みそのものを問い直す企画が、複数の場で展開されたことにあったように思います。なかでも特徴的であったのが、公開シンポジウム「アジア・アフリカの〈狡知・規知・統知〉から近代学校教育を問い直す」です。本企画では、近代学校教育が何を「正しい知識」とみなし、いかなる人間形成を望ましいものとしてきたのかを問い直すことを目的としました。そのために、学校制度の内部だけではなく、その外側、あるいは制度との交錯のなかで生み出される多様な知に目を向けました。具体的には、日常的な実践のなかで状況に応じて編み出される「狡知」、宗教的・倫理的秩序を通して人びとの生を方向づける「規知」、国家や制度による統治が人びとの認識や行為に作用する「統知」という三つの知を手がかりとしました。これらを相互に独立した固定的なカテゴリーとしてではなく、現実の社会のなかで交錯し、ときに緊張し、ときに補完し合いながら、人間形成に作用する知のあり方として捉えることを試みました。

当日は、小川さやか（非会員、学校法人立命館副総長／立命館大学副学長）に、タンザニアの零細商人マチングの実践を手がかりとして「狡知」について論じていただきました。また、久志本裕子会員（上智大学）はイスラーム社会における宗教的人間形成を「規知」の観点から、小川佳万会員（広島大学）は中国の少数民族教育と国家統治との関係を「統知」の観点から論じました。三つの報告を通して浮かび上がったのは、教育を学校制度の内部で完結する営みとして捉えることの限界です。人びとは社会のなかで学び、規範と折り合いをつけ、制度に適応するだけでなく、ときにそれを利用し、ずらし、読み替えながら自己を形成していきます。そうした営みに目を向けることで、教育をより広い人間形成の過程として捉え直す可能性が示されたのではない

かと思います。

この問いは、他の企画にも通底していたように思います。課題研究Ⅰでは、日本とフランスのコンピテンシー・ベースの高等教育改革を比較しながら、大学教育における知識と能力の関係が問い直されました。研究委員会企画の課題研究Ⅱでは、「つながる時代の比較教育学」をめぐる3年間の議論を踏まえ、多様な地域、方法、研究対象をもつ比較教育学において、何を共通の基盤として共有しうるのが議論されました。また、学会創設60周年記念企画では、比較教育学研究者が蓄積してきた写真資料をどのように継承し、研究・教育資源として未来につないでいくのかという課題が提起されました。これらを通して改めて感じたのは、比較教育学とは「異なる国や教育制度を比較する」だけの学問ではないということです。異なる社会のなかで、人びとがどのように学び、どのような知を身につけ、どのような制度や規範と関わりながら生きているのかを考える。そして、その比較を通じて、私たち自身が当然と思っている教育や学校のあり方を問い返す。そのような比較教育学の役割を、今回の大会全体を通して再確認することができたように思います。

もう一つ印象的であったのは、対面で集うことの力です。大会期間中、各会場での質疑だけでなく、発表後の立ち話や昼食時の会話、偶然の再会から、新たな議論や研究上のつながりが生まれていました。7月4日の情報交換会には220名が参加し、世代、所属、研究領域を越えた活発な交流が行われました。オンラインで研究交流が容易になった現在だからこそ、同じ場所に集まり、予定されたプログラムの隙間で言葉を交わすことの意味を強く感じました。大会最終日にはブックトーク・セッションと若手研究者交流会が開催されました。学会大会が研究成果を発表するだけの場ではなく、研究者同士が出会い、新しいテーマや共同研究の可能性に触れる場であることを、こうした企画も改めて示していたように思います。

そして、本大会を形にするうえでは、運営体制そのものにも一つの工夫がありました。開催校である立命館大学に所属し、かつ日本比較教育学会の会員であるメンバーは3名に限られていました。そのため、大会準備をこの3名だけで担うのではなく、学内外の人材を組み合わせた体制をとることにしました。まず学内では、大会準備委員長・羽谷沙織、事務局長・細尾萌子、委員・堀江未来が中心となって準備を進めました。そのうえで、学会員ではないものの、研究・教育活動や大学運営に関する実務経験を有するLiang Xiaoxian（立命館大学研究機構講師）、東侑希（立命館アジア太平洋大学／BRIDGE Institute）にアシスタントとして加わっていただきました。さらに、開催校内部の人員だけで完結させるのではなく、近畿地区の学会員である石川裕之（京都女子大学）、坂口真康（大阪大学）、白銀研五（びわこ学院大学）、関口洋平（大阪公立大学）にも委員として協力いただきました。結果として、開催校に所属する学会員と実務支援アシスタント、そして近畿地区の学会員がそれぞれの強みを持ち寄り、いわばハイブリッドな準備体制を構築することができました。プログラム編成、参加者対応、会場運営、情報発信など、多岐にわたる業務を、それぞれの専門性と経験に応じて分担できたことは、大会を円滑に運営するうえで大きな力となりました。近年、学会大会の開催を検討する際に、開催校に十分な学会員や大学院生がいるかどうか大きな課題になることがあります。しかし、本大会の経験からは、開

催校内部の人数だけを前提にするのではなく、実務支援人材や地域の学会員とも連携することで、持続可能な大会運営の形をつくることが可能であると感じました。この点は、第 62 回大会の運営上の一つの特徴であったと思います。

こうして第 62 回大会を無事に終えることができたのは、大会準備委員会の皆様、当日の運営を支えてくださった皆様、日本比較教育学会理事会、各種委員会、学会事務局の先生方、第 61 回大会準備委員会の皆様、出版社をはじめとする関係者の皆様、そして何より、京都・衣笠まで足を運び、大会をともにつくってくださった参加者の皆様のお力添えによるものです。改めて厚く御礼申し上げます。



シンポジウム



60 周年記念企画ランチタイムセミナー



情報交換会



Y-Net 若手研究者交流会



課題研究 I



課題研究 II

3. 第 36 回平塚賞の選考を終えて

平塚賞運営委員会 委員長
乾 美紀

第 36 回平塚賞候補作品には、4 点の応募がありました。2026 年 4 月 26 日（土）に開催した選考委員会で慎重な審議を行った結果、平塚賞（本賞）を内田直義会員の『アズハルの学校「マアハド」：現代エジプトのイスラーム教育制度改革』（ナカニシヤ出版）に授与することに決定しました。

本研究はイスラーム教育の最高峰であるアズハルへの初等・中等教育機関であるマアハドに着目し、そこでのイスラームの学びがエジプトの人々になぜ必要とされたのか考えること、そして現代エジプトのイスラーム教育の制度が、国からのいかなる改革の方針と教育現場の期待や葛藤との相互作用によって形成されてきたかを明らかにすることを目的としています。

この作品が極めて高く評価されたことには次の理由があります。まず、アズハル教育制度改革に焦点を当て、歴史的な変遷とともに現状に至る法令の分析を厳密に行うことによりエジプトの宗教教育の地域的特性を実証的に描き出している点です。特にアズハルが、伝統を守るだけではなく欧州流の近代公教育へと制度改革を行ってきたという新たな知見を提供したことに高い独創性が認められました。次に、教育改革に対する人々の受け止めや実際の対応を現場の教職員や児童生徒、保護者といったローカルな視点から描き出し、総合的に理解しようとしている点、そして長期のフィールド調査を通して入手困難な現地での一次資料を入手して丁寧に分析・考察している点も高い学術的意義を備えていると評価されました。

エジプトの地域研究にとどまらず、他のイスラーム社会の教育研究にも参照されるべき内容であり、比較教育学の発展に大きく貢献する極めて高い情動的・資料的価値を持っており、独創性が極めて高い研究です。

また、選考委員会では、平塚賞（特別賞）を神内陽子会員の著書『インドネシアの少年非行と教育—国家・慣習・宗教からのアプローチ—』（東信堂）に授与することを決定しました。本書の目的は、インドネシアにおける少年非行および更生教育の実態について、法多元主義の分析視点を援用し、国家、慣習、宗教からのアプローチと、それら総合の関係性に焦点を当てて明らかにすることです。

これまで、少年非行研究は更生の理念や制度設計に焦点が当てられがちですが、本書はインドネシアにおいて多様な主体が関与する実態に着目し、それらの相互作用を「教育的営み」として具体的に描出している点が高く評価できます。なかでも公教育制度からこぼれ落ちた彼らに着目したことで、かえってインドネシア社会と教育の特質を描き出せたことは、比較教育学研究にとって非常に意義深いと評価されました。

また、研究手法については、少年非行の問題や更生に関わる多様な関係者への聞き取りと実践の観察、当事者の少年の語りの理解と解釈を行っている点などが称賛されました。緻密な調査とそれに基づく研究史資料の解析、当該分野の情報をまとめたという点でも、貴重な史資料的価値

を持つ研究としてみなされました。

会員の皆様のご協力によって本賞および特別賞が選ばれたことは、学会における研究の発展に寄与するものとして大変喜ばしく思っています。3年間、委員長を務めあげることができたのは、平塚賞運営委員の先生方や会員の方々のお力添えの賜物だと感じ、大変感謝しております。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

4. 第36回平塚賞を受賞して

<本賞>



内田 直義

このたび、拙著『アズハルの学校「マアハド」：現代エジプトのイスラーム教育制度改革』に対し、第36回平塚賞という大変栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。平塚賞運営委員会の先生方、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、これまでご指導くださった先生方をはじめ、研究をささえてくださった

皆様に改めて深く感謝申し上げます。

拙著は、エジプトのイスラーム総合機構アズハルが管轄する学校「マアハド」を対象に、その制度改革の過程を、法整備と学校関係者の経験という2つの側面から分析したものです。20世紀を通じたアズハルの教育部門の制度改革の過程をたどるなかで、イスラームの専門家養成の従来の機能を維持しつつも、他方では規模拡大と宗務以外を目指す多様な児童生徒の受け入れ、さらに学校設置への地域住民の参加といった改革をマアハドが進めてきた状況をまとめ、その意義について考察しました。

アズハルはイスラーム教育の要として国際的によく知られていますが、その学校制度の形成過程、とりわけ1961年のアズハル再組織法成立以降の展開について、アラビア語以外で体系的にまとめた研究は限られています。拙著には、アズハルの学校をエジプト国外のイスラーム学校や国内の一般教育機関の事例と比較して考えるための基盤を提示したという意義があると考えています。また、拙著は未公開の文書資料に加え、当事者である地域住民や学校関係者への聞き取り資料を多く活用しました。制度改革の動向を実証的に描いた資料的な価値に、本研究のもうひとつの重要な意義があると考えています。

ある面では、今回高い評価をいただけた背景には、エジプトやアズハルという研究対象自体がもつ魅力にもささえられていると感じています。今後も研究に真摯に向き合う中で、世界にはこんなにも多彩で豊かな教育があること、また、逆に一見すると遠く見えても実はどこかで自分たちの慣れ親しんだ教育とも繋がっていること、そうした比較研究の面白さを伝えていけるように微力ながら尽力してまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

<特別賞>

神内 陽子



このたびは、拙著『インドネシアの少年非行と教育——国家・慣習・宗教からのアプローチ』に平塚賞特別賞を賜り、誠にありがとうございます。平塚賞運営委員会の先生方、長年ご指導くださった名古屋大学の先生方、そのほか、ご助言・ご支援くださった多くの方々に、心より御礼申し上げます。

本書の出発点となった問いは、「インドネシアの人々は少年非行の問題をどのように解決しようとしているのか。そこでは何が非行とみなされ、いかなる基準によって少年たちは更生したと判断されるのか」というものです。本書では、国際的な少年司法改革の動向や国内の制度改革だけでなく、地域固有の慣習にもとづく問題解決法や宗教教育なども含めた非行問題への多様なアプローチを取り上げ、更生支援に携わる人々や少年自身にとって非行と更生がどのような意味をもつのかを、できるかぎり当事者の視点から明らかにすることを試みました。

調査では、窃盗や暴行、性犯罪、殺人事件の加害者のほか、薬物依存症者やストリートチルドレン、ギャングの一員など、さまざまな事情を抱えた少年たちと出会いました。彼ら・彼女らと関わるなかで、からかわれたり、大真面目に嘘をつかれたり、あの手この手でお金を無心されたりして、たじろぐこともありました。本書は非行をテーマにしていますが、実は私自身も昔はやんちゃだった——というわけでもなく、非行とはほど遠い真面目な思春期を過ごしてきました。そんな私が「当事者の視点から」といいながら、彼らのことをどれくらい適切に理解できたのかは分かりません。

もっと暴力的ではないかたちで、彼らについて書くことができたのではないか。あのとき、彼らの語りを記録すること以外の方法で、もっと彼らのためになることができたのではないか——そのような問いも折に触れて頭をよぎります。私が抱えてきた他者理解への願望は、ある意味で不完全なかたちでの成就となりましたが、異文化理解の可能性と限界を学問的に問うことの面白さは尽きません。

本書にはなお多くの課題が残されています。未熟ながらも、学問の発展にわずかでも貢献できるよう、今後も地道に研究に取り組んでまいります。

5. 総会報告（第 62 回大会）

2026 年 7 月 4 日（土）に、第 62 回大会総会が開催されました。総会の議事次第は以下の通りです。

日時：2026 年 7 月 4 日（土）17：00～18：00

場所：立命館大学

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 大会校ご挨拶
4. 議長団選出
5. 2025 年度事業報告(事務局、各種委員会)
6. 平塚賞授賞式と記念撮影
7. 選挙管理委員会からの報告
8. 2025 年度決算報告および監査報告
9. 新旧事務局の交代
10. 旧会長挨拶
11. 新会長挨拶
12. 新役員、各種委員会、監査について(事務局)
13. 2026 年度事業計画(事務局、各種委員会)
14. 2026 年度予算案(事務局)
15. 第 63 回大会について
16. 議長団解任
17. 閉会の辞

6. 日本比較教育学会役員一覧（2026-2028 年度）

- 会長 森下 稔(東京海洋大学)
- 事務局長 市川 桂(東京海洋大学)
- 事務局長補佐 荻巣 崇世(東京大学)

- 理事（○印は常任理事）
- [北海道・東北地区]（2 名）
- 青木 麻衣子(北海道大学)
- 飯田 直弘(北海道大学)

- [関東地区]（14 名）
- 荻巣 崇世(東京大学)
- 鴨川 明子(早稲田大学)
- 北村 友人(東京大学)
- 黒田 一雄(早稲田大学)

- 澤野 由紀子(聖心女子大学)
- 杉村 美紀(上智大学)
- 西村 幹子(国際基督教大学)
- 橋本 憲幸(山梨県立大学)
- 林 寛平(信州大学)
- 日暮 トモ子(日本大学)
- 福留 東土(東京大学)
- 丸山 英樹(上智大学)
- 森下 稔(東京海洋大学)
- 渡邊 あや(津田塾大学)

[東海・北陸地区] (3 名)

内海 悠二(名古屋大学)

○ 服部 美奈(名古屋大学)

松本 麻人(名古屋大学)

[近畿地区] (7 名)

王 可心(神戸大学)

○ 小川 啓一(神戸大学)

坂上 勝基(神戸大学)

桜井 愛子(神戸大学)

園山 大祐 (大阪大学) (2026 年 9 月 1
日から)

○ 近田 政博(神戸大学)

土久岡 真美(神戸大学)

八木 歩(神戸大学) (2026 年 8 月 31 日ま
で)

[中国・四国地区] (5 名)

小川 佳万(広島大学)

○ 日下部 達哉(広島大学)

坂田 のぞみ(広島大学)

○ 牧 貴愛(広島大学)

吉田 和浩(広島大学)

[九州地区] (2 名)

○ 佐藤 仁(福岡大学)

花井 渉(九州大学)

●監査

南部 広孝(京都大学)

吉原 美那子(高崎経済大学)

●幹事 (○印は常任幹事)

[北海道・東北地区]

劉 靖(東北大学)

[関東地区]

○ 市川 桂(東京海洋大学)

○ 小原 優貴(東京大学)

○ 工藤 瞳(慶應義塾大学)

○ 塩山 皐月(東京大学)

○ 山崎 直也(帝京大学)

[東海・北陸地区]

千田 沙也加(中京大学)

[近畿地区]

サンフォ ジャンバティスト

モハマドゥ バシル(兵庫県立大学)

田村 徳子(大阪公立大学)

[中国・四国地区]

朝倉 隆道(広島大学)

内田 直義(就実大学)

[九州地区]

伊藤 亜希子(福岡大学)

【各種委員会】

●平塚賞運営委員会 (10 名)

委員長 鴨川 明子

委員

小川 佳万

日下部達哉
佐藤 仁
杉村 美紀
近田 政博
服部 美奈
福留 東土
森下 稔
渡邊 あや

●紀要編集委員会（14 名）

委員長（前期）佐藤 仁
委員長（後期）西村 幹子
委員

石嶺 ちづる
伊藤 亜希子

乾 美紀
内海 悠二
坂上 勝基
坂田 のぞみ

関口 洋平
高橋 望

タスタンベコワ・クアニシ

山内 乾史
劉 靖

渡部 由紀

編集幹事（前期）内田 圭佑

編集幹事（後期）Eiman Yassin
八木 歩

●研究委員会（8 名）

委員長 丸山 英樹
委員

伊井 義人
黒川 智恵美
園山 大祐

徳永 智子
南部 広孝
畠山 勝太
米原 あき

●国際交流委員会（7 名）

委員長 日下部 達哉
委員

朝倉 隆道
内田 直義

川口 純
澤野 由紀子
橋本 拓夢
見原 礼子

●若手ネットワーク委員会（10 名）

委員長 牧 貴愛
委員

飯田 直弘
門松 愛
千田 沙也加
中島 悠介
花井 渉

学生会員委員代表 横山 穂佳

副代表 浅越 天真

委員
小田 瑞穂
丹伊田 真央

●広報委員会(7 名)

委員長 林 寛平
委員

芦田 明美
小川 未空
グリゴリー・ミソチコ

関 楽平
両角 達平
渡邊 あや

●WCCES 担当理事

森下 稔
黒田 一雄

●教育関連学会連絡協議会 担当理事

青木 麻衣子

●会務運営検討委員会（6 名）

委員長 近田政博

委員

飯田直弘

南部広孝

濱谷佳奈

日暮トモ子

松本麻人

7. 新委員会委員長からのご挨拶

平塚賞運営委員会

委員長 鴨川 明子

本年度より平塚賞運営委員会委員長を務めます。どうぞよろしくお願いいたします。既にホームページに掲載されていますが、前委員会より丁寧に引き継ぎしていただいた内容を改めてお伝えします。

平塚賞運営委員会は、第 37 回平塚賞候補作品を例年通り募集します。応募は自薦・他薦を問いません。下記の要領と[日本比較教育学会平塚賞規定](#)を参照してください。多くの会員の方々からの応募をお待ちしております。

1. 対象作品：2026 年 1 月～12 月に公刊された比較教育学に関する著書・論文（分担執筆を含む。ただし連名のものを除く）
2. 応募要領：本学会ホームページ掲載の「平塚賞候補著書・論文推薦書」(MS-Word, PDF)に必要事項を記入し、当該著書・論文 1 部とともに提出すること。
3. 締め切り：2027 年 1 月 31 日（日）（必着）
4. 送付先：〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401（株）ガリレオ気付
日本比較教育学会・平塚賞運営委員会
5. 問い合わせ先：g020jces-mng@ml.gakkai.ne.jp

紀要編集委員会

委員長(前期) 佐藤 仁

この度、紀要編集委員長(前期)を拝命しました福岡大学の佐藤仁です。どうぞよろしくお願い申し上げます。後期の編集委員長は、西村幹子(国際基督教大学)会員に担当いただきます。

9月現在、紀要第74号の編集を進めています。第74号での特集として、立命館大学で開催された第62回大会での公開シンポジウム「アジア・アフリカの〈狡知・規知・統知〉から近代学校教育を問い直す」を取り上げ、当日の報告を踏まえた論稿を掲載することになりました。ぜひ多くの会員の皆様に、公開シンポジウムで展開された知的な議論を感じて欲しいと思います。

第73号より、オンライン投稿システムを通した投稿をお願いしております。まだ不十分な箇所もあるかと思しますので、今後、よりスムーズな運用に向けて、検討を進めていきたいと思っております。

研究委員会

委員長 丸山 英樹

このたび研究委員長を拝命いたしました丸山です。委員の皆さま、そして会員の皆さまのお力を借りながら、これから3年間、研究委員会の活動に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

研究委員会の大きな役割の一つは、大会での課題研究の企画です。まず来年度に向けては、「比較教育学を学びほぐす」という視点から、AIが急速に普及する時代に、比較教育学の研究、教育、そしてフィールドワークのあり方を改めて考える機会をつくりたいと考えています。ただし、委員会だけで完成した企画をつくるというよりも、さまざまな立場の会員の皆さまから問いや異論、アイデアをいただきながら、ともに考える場にできればと思います。

また、課題研究に限らず、比較教育学をめぐる新しい動向や研究方法、研究・教育活動を支えるためのセミナーなども企画していきたいと考えています。早速でしたが、7月下旬に開催した科研費申請オンラインワークショップには53名の方にご参加いただき、多くの方からお礼のご連絡をいただきました。どこまで実現できるかわかりませんが、世代や専門領域を越えて知見や経験を共有し、新しい研究のきっかけが生まれるような研究委員会を目指します。

会員の皆さまからも、取り上げてほしいテーマや試してみたい企画など、ぜひお気軽にお寄せください。3年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際交流委員会

委員長 日下部 達哉

このたび国際交流委員長を仰せつかりました日下部です。これから様々な国際交流活動に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

森下新会長よりいただいた役割の一つ目は、アジア比較教育学会（CESA）と協力して世界比較教育学会（WCCES）を日本で開催するということです。このため、2027 年 7 月に予定される WCCES コートディボアール・アビジャン大会でビッド・ペーパーを提出する予定です。二つ目は、黒田前委員長が力を尽くされてきた、国際学会における JCES の企画によるパネル発表を、今期においても継続していくことです。まずは、2027 年 7 月の WCCES（アビジャン）、11 月の CESA（ジャカルタ）において、日本で積み重ねてきた研究の成果を世界に発表し、知見をグローバルにつなげていくことを目指します。

上記の二本柱に加え、英語で発表、あるいは論文を書くためのワークショップの開催や、国際学会でパネルを開催するなどの意欲のある会員を対象とした大型科研獲得セミナーなども企画予定です。委員一丸となってことにあたる所存です。3 年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

広報委員会

委員長 林 寛平

広報委員会では、会員向けのメーリングリストの運営、紀要論文の J-Stage への掲載、学会ホームページ英語サイトの更新などを担当します。まずは前委員会の引き継ぎを丁寧に行い、ルーティン業務を滞りなく進めることで、会員の皆様の学術活動に支えてまいります。その上で、比較教育学の魅力を広く社会に伝えられるような活動も模索したいと考えています。あわせて、持続可能で、学術の発展に寄与できる広報委員会のあり方についても検討してまいります。

メーリングリストへの配信を希望される方は以下のフォームよりご入力ください。

<https://forms.gle/XUPkMpyuXuoZZyPN7>

また、広報委員会へのお問合せは jces.mailinglist@gmail.com までお願いします。

3 年間、どうぞよろしくお願いします。

若手ネットワーク委員会（Y-Net）

委員長 牧 貴愛

2026 年 7 月より若手ネットワーク委員会（Y-Net）委員長を拝命いたしました。委員、学生会員委員、サポートメンバーとともに、若手研究者の交流とネットワーク形成を支える活動に取り組んでまいります。

第 62 回大会では、7 月 5 日に立命館大学衣笠キャンパスにおいて若手研究者交流会を開催し、70 名を超える皆様にご参加いただきました。所属や研究分野を越えた活発な交流が行われ、新たなつながりを築く貴重な機会となりました。ご参加、ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

今期の委員会では、「若手研究者が研究室や大学の壁を越えて新たなネットワークを築く場をつくること」を基本方針としています。また、日本比較教育学会が培ってきた研究文化を学び、その継承と発展に若手研究者が主体的に関わることを目指します。具体的には、①年次大会での

若手研究者交流会の継続開催、②学会の研究文化を学ぶ勉強会の実施と成果発信、③先生方のお話を伺うオンライン座談会、④テーマ別オンライン座談会（パパ・ママ会、留学生交流会、地域別交流会等）の開催を予定しています。

若手研究者同士がつながり、学び合い、支え合える場づくりを進めてまいります。
jces.ynet@gmail.com まで、会員の皆様のご意見、ご提案をお寄せいただければ幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

委員（五十音順）

飯田直弘（北海道大学）、門松愛（大谷大学）、千田沙也加（中京大学）、中島悠介（京都大学）、花井渉（九州大学）、牧貴愛（広島大学）

学生会員委員

代表：横山穂佳（名古屋大学大学院） 副代表：浅越天真（九州大学大学院）

委員：小田瑞穂（早稲田大学大学院）、丹伊田真央（東京大学大学院）

サポートメンバー

奥山雄太（広島大学大学院）、Kawtar Maya（筑波大学大学院）、西山喜満主（京都大学大学院）、服部拓磨（広島大学大学院）、藤原土紀（神戸大学大学院）、船橋唯介（東京大学大学院）、前田誠也（神戸大学大学院）

世界比較教育学会（WCCES）からのお知らせ

担当理事 森下 稔・黒田 一雄

この度、森下会長と共に、WCCES の担当理事を務めさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

世界比較教育学会（WCCES）第 19 回大会については、主催する Global Africa Comparative & International Education Society の N'Dri Assie-Lumumba 氏より、大会案内の Flyer が届きました。今後、ホームページが開設され、申し込みできるようになるということです。会員のみなさまには積極的にご参加くださるようお願い申し上げます。下記 URL から Flyer を閲覧することができます。

https://drive.google.com/file/d/1xOGKjTmQYF63c0xna-fbU7lrk_bE9Osx/view?usp=sharing

概要は次の通りです。

開催日程：2027 年 7 月 12 日（月）から 16 日（金） 14 日にエクスカージョンを予定

開催地：Université Félix Houphouët-Boigny in Abidjan, Côte d'Ivoire （コートジボワール、アビジャン、フェリクス・ウフエ＝ボワニ大学）

テーマ：Committing to Educational Transformation for Global Flourishing: uBuntu and Sankofa Inspired Pathways

18 のサブテーマ

発表申込期限：2026 年 11 月 15 日

教育関連学会連絡協議会

担当理事 青木 麻衣子

このたび、前任の杉村美紀先生（上智大学）のあとを引き継ぎ、教育関連学会連絡協議会担当理事を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。教育関連学会連絡協議会では、毎年 3 月に総会が行われていますので、そちらに参加し、必要情報等、会員みなさまにお知らせいたします。また、加盟学会のシンポジウム等の情報につきましても、必要に応じ、みなさまにご連絡できればと思います。

会務運営検討委員会

委員長 近田政博

本学会創設から 60 年が経過し、運営上でさまざまな課題が山積しています。この委員会は森下新会長の肝いりで設置された特別委員会で、学会の維持発展に必要な会務運営のあり方を中長期的に検討すること、望ましい学会のあり方を実現するために理事選挙制度を検討することを目的としています。具体的には、2029 年実施の理事選挙から適用する新制度を理事会に提案できるように進めてまいります。新制度での選挙を実施するためのオンライン選挙システムの改修作業を検討します。また、学会の将来像や望ましいあり方を実現するための議論のまとめを報告し、具体的な提案を理事会に提言します。「20 年持続できる仕組みを考えてほしい」と会長から仰せつかっています。学会運営についてのご意見がありましたら随時お聞かせください。

アーカイブ構築プロジェクトチーム

担当理事 服部美奈

本年 7 月の総会で、学会創設 60 周年記念事業（2023 年－2026 年）の一環として森下理事（現会長）が精力的に推進してくださいましたフィルム・カメラのアーカイブ化事業の継続をご承認いただき、このたび、アーカイブ化担当理事を拝命いたしました。

第 1 回の委員会を 2026 年 8 月 31 日に開催し、「アーカイブ構築プロジェクトチーム」が立ち上がりましたのでご報告させていただきます。活動期間は、JCES 第 62 回大会総会後～JCES 第 65 回大会総会前（2026 年 7 月～2029 年 7 月頃）となります。立ち上げメンバーとして、市川桂事務局長、坂口真康会員、神内陽子会員、関口洋平会員、千田沙也加会員、園山大祐会員、橋本憲幸会員、松本麻人会員、森下稔会長（50 音順）にお世話になります。また西野節男会員に顧問をお願いしております。

直近の活動としましては、アーカイブ活動を行っている組織や経験者への聴き取りと助成金申請のための情報収集を行いつつ、写真のご提供のお願いを進めていきたいと思っております。これから会員の皆さまにもご意見をいただくとともに、ご支援をお願いすることになりますが、何卒ご協力を賜れましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

8. 第 63 回大会について

第 63 回大会実行委員長 北村 友人

このたび、2027 年度の第 63 回日本比較教育学会年次大会を東京大学にて開催させていただくこととなりました。学会活動の核ともいべき年次大会を本学で開催できますことを、誠に光栄に存じます。

東京大学には、本学会に所属する教職員や学生も多く、大会の開催にあたっては、学内の関係者が力を合わせ、皆さまをお迎えできるよう準備を進めてまいります。東京大学本郷キャンパスでの年次大会は、2017 年度の第 53 回大会以来、10 年ぶりとなります。再び本学で大会を開催し、皆さまをお迎えできますことを、大変嬉しく思っております。

大会の日程は、2027 年 6 月下旬あるいは 7 月上旬を予定しております。詳細につきましては、決まり次第、改めてご案内いたします。

緑豊かな本郷キャンパスで、皆さまと議論を交わし、交流を深められることを、関係者一同、心より楽しみにしております。ぜひ多くの皆さまにご参加いただきますよう、何卒よろしくお願いいたします。

9. お知らせ

● 2025 年度会計報告

<WEB 版では非公開>

● 2026 年度予算案

<WEB 版では非公開>

● 事務局の移転について

事務局は 2026 年 7 月の総会で東京海洋大学に移転しました。学会運営に関する連絡は以下の事務局（東京海洋大学内）までお願いします。住所は以下の通りです。なお、メールアドレスは今までと同じです。

〒135-8533 東京都江東区越中島 2-1-6 東京海洋大学海洋工学部 日本比較教育学会事務局（市川研究室）

E-mail: jcesjimu@outlook.jp（ご連絡はメールでお願いいたします。）

● 学会への寄贈図書

以下の図書を、著者・出版社より本学会にご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。
なお、紀要および研究報告書の寄贈については、数量多数のため、掲載を割愛させていただきます。ご了承ください。

- ガラーウィンジ山本香『難民がつくる学校教育—シリア人学校はいかにトルコで創られ、人びとを繋ぎ、支えたのか』明石書店、2026年3月。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4750360708>
- アブデルジャリル・アッカリ、ミリアム・ラドワン著、渋谷恵、見世千賀子、中山あおい、島埜内恵、菊地かおり訳『教育への異文化間アプローチ—理論から実践へ』明石書店、2026年3月。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4750361038>
- 朴聖希『韓国の小学校教員養成—日韓比較からみる教職選択と教師像』明石書店、2026年3月。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4750360791>
- 松尾知明『教科横断的カリキュラムデザイン—新しい教育課程へ向けた「学びの再定義」』明石書店、2026年。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4750361410>
- 水野谷優、小川啓一、小原ベルファリゆり編『社会性と情動の学習—SEL と非認知スキルで未来を拓く教育』東信堂、2026年。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4798920207>
- 渡辺哲司編『事実と意見を区別する言語技術—その学び方、教え方を考える』ひつじ書房、2026年。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4823413636>
- 岩下誠・前田更子編『宗教と世俗化の比較教育社会史』昭和堂、2026年。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4812225191>
- 丸山英樹・浅井幸子・仁平典宏・隠岐さや香・石井英真編『教育学年報 17 崩壊する惑星地球における教育と希望』世織書房、2026年。
<https://www.amazon.co.jp/dp/4866860553>

図書・刊行物の送付、学会運営に関する連絡

〒135-8533 東京都江東区越中島2-1-6

東京海洋大学海洋工学部日本比較教育学会事務局（市川研究室）

E-mail: jcesjimu@outlook.jp（ご連絡はメールでお願いいたします。）

- **新入会員**

<WEB 版では非公開>

- **年会費納入のお願い**

年会費納入状況をご確認いただき、未納分がある方は下記の口座へ早めのご納入をお願いいたします。紀要は年 2 回発行ですが、本学会では当該年度の会費納入を確認後、学会紀要『比較教育学研究』をお送りしています。3 年を超えて会費未納の方は会員資格を失います。

〔郵便振替口座〕00820-6-16161 日本比較教育学会事務局

会員情報、入退会、会費、システム、HP に関する連絡

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401

(株) ガリレオ 東京オフィス

学会業務情報化センター内 日本比較教育学会事務局

Tel : 03-5981-9824/ Fax : 03-5981-9852

【注意】

所属機関名にて振込を行われる場合は、該当会員を特定することが難しいため、必ず事務局へご連絡をお願いします。

「学生会員」として登録されている会員で、所属・身分等の変更により「学生」でなくなった方は、会員情報管理システムにて通常会員へ資格変更の上、通常会員としての年会費（10,000 円）をお支払いください。

- **特別会員制度について**

すでにご案内申し上げておりますとおり、2020 年 8 月に開催された総会にて、「特別会員」制度が認められました。この制度は「本会に対して一定の貢献があり、原則として 10 年以上にわたり本会の会員である者。かつ、常勤の定職にはついておらず学生の身分ではない者。」（会則第 4 条関係：細則第 2 条）となっており、会費は年額金 6,000 円です。特別会員になる場合には、学会事務局に申込み、常任理事会での承認を得ることとされています。お申し出は随時、学会事務局 (jcesjimu@outlook.jp) で受け付けております。